

【ハンギョレ新聞】2005年7月7日(木)

アジアの「記憶」



タイ人とカンボジア人が熱心に自分の国の自慢をしている。「タイ・マッサージ、キック・ボクシング、タイ・ダンスはすべてアンコールワット寺院の浮彫にあるものなのでカンボジアが元祖だ!」とのカンボジア人の主張に対し、タイ人は、「それはアンコールワットもタイの文明である証拠だ!」と答えた。この冗談話は実は軽くない。両国はこの問題で戦争直前まで行った。

去る2003年にプノンペン駐在のタイ大使館と企業の建物を、怒ったカンボジア人たちが焼いたり踏みつけた。タイの国王が素早く止めなかったら戦闘機4台がプノンペンに報復の爆撃をしたはずだ。あるタイの女優がプノンペンのラジオ放送で「アンコールワットはタイのもの」と話したのが暴動の原因であるとの報道を読んで理解できなかった記憶がある。今回その地域の人たちと会って話しをしてから、タイ・カンボジア・ミャンマー(ビルマ)間の歴史的紛争は、韓・中・日の間のもの以上に古くて頭痛い問題であることが解った。

アジア12カ国から来た言論人・学者・市民運動家たちが先月末に福岡と釜山に集まった。この集まりは、アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラムを通じて9年間顔を覚え、討論を行っている言わば「公的知識人」のアジアネットワークである。今回の総会のテーマは、「アジア共同体、観念か現実か?」だった。東アジア問題を理解するだけでも力不足なので、難しいテーマ

であったが、少なくとも、アジアの国の中で隣国と古い葛藤の歴史がない国はないことを確認することができた。

参加者たちが4泊5日間頭を抱えた話題は「記憶」であった。植民支配と種族、国の中の葛藤、そして階層間の葛藤は山場ごとに痛い記憶として蘇る。このような歴史的な記憶はどのように作られ、どのように忘れられるのか、また、どのように悪用されるのか。

最近問題になっている東アジアの歴史紛争はみんなの関心事だった。韓国、中国、そして日本の中の頑固で、場合によっては感性的な反目はなぜ起こるのか。この地域での日本の植民支配が特に長くて強かったからなのか。250年間のオランダの植民地支配の後に3年半間日本の支配を受けたインドネシアの参加者は、「その3年半がもっと長かった」と述べた。立教大学の李鍾元教授は、文明を伝えてくれた国を侵略したことに対する裏切られた気持ち、あまり心のこもってない謝り、そして不安定な未来ということをも理由として挙げた。日本西南女学院大学の菅英輝教授は、歴史問題を解決する鍵として、民主化と人権尊重を挙げ、日本より進んだ韓国の市民社会が、韓国内の過去清算だけではなく日本との和解と相互理解にも寄与するだろうと述べた。

「アジア」の語源は「東側にある土地」だ。ヨーロッパが自分の正体性を決めた後の外、即ち植民地化の遺産であるのだ。そのため、「アジア」という単語はいつも何となく不足で、静的なことを指す。参加者たちは、新しいアジアの正体性を、多様かつ多元的な価値と漸増する市民連帯を土台にして構築することで意見を一致した。心狭い民族主義を克服し、お互いの共通点と平和・交流・市民社会を育てるべきだ。これを通じてこそ痛い歴史的記憶は和解と容赦に席を譲るだろう。

そのような実践のひとつの事例として、最近韓・中・日の市民団体が出版した共同教科書「未来を開く歴史」は参加者たちから高い関心を集めた。アジア共同の歴史教科書を作ろうとの提案も出た。タイとカンボジアも紛争の解決方法として、歪曲されている歴史教科書を直すことに2年前に合意した。

趙弘燮・編集局副局長